

会長就任にあたって

一般社団法人日本社会福祉学会 会長 空閑 浩人(同志社大学)

このたび、日本社会福祉学会の会長(第8期)を仰せつかりました同志社大学の空閑浩人(くがひろと)です。正直に申し上げますと、今回の役員選挙の結果が出てから、不安と心配ばかりが募る日々を過ごしてきました。このような歴史と伝統ある学会の会長としては、私自身は、はなはだ力不足です。

しかしながら、この日本社会福祉学会には、たくさんの感謝の気持ちがあります。私が入会させて頂いたのは30年ほど前の大学院生のときでした。緊張して体も声も震えながらの学会発表や、学会誌に論文を投稿した際の心が折れそうになる厳しいコメントを頂いたことを今も覚えています。私にとっては、そのような経験や学びを通して、今日に至るまで、研究者や教育者として鍛えられ、励まされ、そして育ててもらった場所が、この学会です。

そのような学会に、あらためて感謝をし、何より恩返しをしなければいけないという思いが強くあります。力不足は承知の上ではありますが、役員の方や事務局の皆様を支えて頂きながら、精一杯務めさせて頂きたいと思っております。

会員の皆様には、このたび、私とともに理事・監事として着任された先生方、また各委員会の委員となっていただく先生方ともども、ご支援くださいますよう心よりお願い申し上げます。

さて、2020年からの日本における新型コロナウイルス感染症の広がり、私たちの生活を一変させました。そして、コロナ禍で新たに生じた社会問題だけでなく、それ以前から存在していたにもかかわらず、十分な対策がとられてこなかった生活問題が顕在化することになりました。貧困や孤立、差別や格差、分断など、世の中全体の状況は、社会福祉が認め、目指す方向とは、ますます逆の方向に向かっていくように思えてなりません。昨今の私たちが暮らす社会は、様々な社会的で構造的な問題と、それによる生活問題や生活困難を抱える状況にあります。

そのようななかで、あらためて「学問」としての社会福祉学が問われていると思います。私のなかで社会福祉学とは、「価値に基づく実践の学問」であり、「価値に基づく連帯と行動の学問」であると思っています。その社会福祉学の研究や教育、実践の積み重ねとそのあり方が、同時にこの日本社会福祉学会のあり方が、この時代や社会状況のなかで、ますます問われていると思います。私自身も一人の社会福祉研究者として、社会福祉学がもつ「思考の力、言葉の力、行動と発信の力」を信じて、理不尽で不条理な社会の状況に抗うことを辞めずにいたいと思っております。

本学会は、2024年に創立70周年を迎えます。また本年2022年の大会は、第70回という節目の大会となります。そのような時期に行われる本学会の様々な活動や取り組みが、あらためて、社会福祉学の、そして本学会の現在地を見据える機会となり、さらには今後の発展に向けた学びや議論、連帯や協働の機会となることを期待しています。

会員の皆様お一人お一人が、この日本社会福祉学会を構成し、様々な活動や取り組みを推進し、そしてこれまでの社会福祉学の歴史を継承し、現在の、さらにはこれからの社会福祉学の進化と深化を促し、学問としてのさらなる発展を導く、大切な「主体」です。

全国レベルの活動はもちろんのこと、それぞれの地域ブロックでの活動も含めた学会活動への、皆様のより一層の積極的なご参加・ご参画をお願い申し上げまして、ご挨拶とさせていただきます。
今後ともよろしくお願ひ致します。